慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	物語の鮮度 : 中上健次「愛獣」・ 物語内容分析
Sub Title	
Author	浅野, 麗(Asano, Urara)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.38 (2003. 12) ,p.15- 29
JaLC DOI	10.14991/002.20031200-0015
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20031200-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈物語〉の鮮度―中上健次「愛獣」・物語内容分析―

浅野麗

序　「朝来」と「愛獣」の差異と問題点

一九八九年五月の「愛獣」[1]発表のおよそ十年前、中上は『紀州　木の国・根の国物語』[2]として後に上梓される、『朝日ジャーナル』誌上での連載ドキュメントのために、紀州の土地土地を経巡っていた。『紀州　木の国・根の国物語』に収載されている「朝来」[3]の章に、本論で取り上げる「愛獣」の物語内容の祖型を看ることができる。「朝来」において描出される「大谷」、「女」、「足の裏のよごれ」、そして廃馬工場のエピソードは悉く「愛獣」において反復されている。しかし、ここでそれぞれのモティーフを採用することの方法的類似性を指摘しようというのではない。谷崎潤一郎『吉野葛』との関連が多々指摘されるなか[4]、わたしの気に懸かっているのは主に、「日本的自然」との葛藤を内在させた『紀州　木の国・根の国物語』の一つの章である「朝来」の変奏ともいえる「愛獣」が、昭和天皇死亡四ヶ月後に発表されたという点、すなわち「愛獣」を物語言説として捉えた場合のその歴史的意味にあるのだが、本稿ではその前提として、「大谷」・「女」・「足の裏のよごれ」に対し、対称的な認識を抱く「愛獣」の「男」と「朝来」の「私」の、その境位の差異を顕かにし、「愛獣」について、物語内容レベルでの分析をすることを目的とする。

〈I　非中心化されない座標の弊害〉への問題提起

たとえば、「足の裏のよごれ」の表象をめぐっては、次のような差異を確認する事ができるだろう。

「朝来」

父親のものだろうか、**男物のサンダルをはき、足の裏がよごれている。**足首、ふくらはぎが、こころもち太い。丁寧に化粧した顔と**その足の汚れは妙に心をひく。**普通なら興ざめになるところだが、大谷のその小さな山に身を寄せるようにある家で、蒼々とした草や樹木の風景の中に置くと、**水と樹木のここにそのよごれた　足の裏で根を張っていると思えてくる。**

「愛獣」

女の後姿を見た。女のどこよりも、**派手な赤いサンダルをつっかけた足の裏が汚れている**のが眼にとまり、男は**女が**

持っていた一等禍々しい物を見つけてしまったような気がして、あわてて眼をそらした。

「足の裏のよごれ-汚れ」が突出した「女」の特異性として認識されていることにかわりはないが、「朝来」において「私」に熟視されるそれは、「大谷」の「水」や「樹木」という自然の事物と接続され、「妙に心をひく」という好意的な欲動を喚起させるものであるのに対して、「愛獣」においては、「女」の「足の裏の汚れ」は、「男」に「あわてて眼をそら」させるような「禍々し」さを惹起させるおぞましさの象徴とされている。この落差はいったい何を意味するのか？　「足の裏の汚れ」という生のなまなましさを随伴するそれをみつめる両者においての、背反する認識の生起それ自体の意味を問うことは不毛であるが、「朝来」の「私」の好意的なまなざしが反転、「愛獣」の物語の展開過程で随時露呈される「男」の「嫌悪」と「不快」に接続されうるようなそれとして発現することへの問いは有効であろう。たとえば、眼前にある「大谷」の自然と癒着するようにしてある「女」の「足の裏の汚れ」に対する各々の視座が明確になれば、現実的な「大谷」の自然の事物に対する各々の視座を明確にすることが可能になる。即ち「朝来」の「私」であれば、邪気を捨象したところに発現する「大谷」への寛容を孕み、「愛獣」の「男」であれば、鋭敏な悪意を付随させた「大谷」への緊張を孕んだまなざしが発現している、という差異が明確になるのではないだろうか。であるならば、「男」の、現実の「大谷」、そしてそこに属する者に対する緊張の強度を開示する叙述が「愛獣」において確認できよう。それについて、〈Ⅰ　非中心化されない座標の弊害〉と題して、「男」の緊張＝苛立ちの淵源を窺い、物語世界の中で特権的な固定点として自身の境位を保持しつづける「男」の在り方の諸相を俯瞰してゆこうと思う。「男」のまなざしの、その連続性の切断の契機はおとずれるのであろうか？　あるとすれば、どのように？　このような問いの可能性を見据えつつ、「男」の境位をめぐっての読解を試みる。

〈Ⅱ　〈物語〉信奉者の幸福な死〉への問題提起

また、廃馬工場を巡ってのエピソードについては、次のような叙述に示される差異を契機に「愛獣」の特異性を浮き上がらせることができるだろう。

「朝来」

立ち働く彼女らのそばで一時、日に干した毛を見、それから家の横の、けずり取った固い土の山肌に咲いた群蒼のすみれの花を見、**「野生のものかな」**と独りごちた。**馬の毛とすみれの花は、私には興味が等価だ、と言ったのと同じである。**彼女はそれで安心したようだった。いや、彼女にはなしかけようとする私の気持ちが一つ焦点をずらすことにより、柔かく通じた。さながら恋のかけひきのようである。

「愛獣」

男はあっちの山の方にその作業場があると女の指差す方を見た。女の家を下の道から目隠しするように茂った雑木の枝が重なり合い、女の言うあっちの山の方は見えなかった。女が男の顔から何か読み取ろうと見つめるのを見て、**男はたとえその臭気が梅の花弁のものであろうと廃馬のたてが**

みや尻尾のものであろうと、匂いに芳香と臭気の違いがあるにすぎないと言うように、「梅の花か」とつぶやく。風にどんな異臭が混じっているのかと注意深く嗅ぐと、緑の匂いが鼻につく。

絶対的な差異。それは「私」が廃馬工場の実態を現実的に〈見る〉のに対し、「男」は廃馬工場の話を〈聞く〉、という点にある。

「私」は、「馬の尻尾」から「バイオリンの弦」を作る作業の工程を見、そのあまりの「衝撃」ゆえに、「一つ焦点をずらす」という配慮のもと、「女」-「彼女」に対峙する。「恋のかけひきのよう」と称ばれる微温のその所作はしかし、「馬の毛」と「すみれの花」への「興味」が「等価」であるとする「私」の作為を顕かにしている。おぞましさを孕み持つ「馬の毛」と可憐な「すみれの花」とに受ける印象の懸隔は甚だしく、にも拘わらず「私」がそれを「等価」だと認識していることを「彼女」-「女」に伝達しようと図ることで逆説的に暴露されるのは、「等価」だと言わしめる「私」の内面にある〈差別〉意識の存在である。自覚的に「すみれの花」への「興味」を選択して「馬の毛」への「興味」を押し隠し、それらを「等価」だと措定するのは、「馬の毛」と「すみれの花」とを絶対的に区別している「私」の指向を暗示するだろう。「私」によるこの二者の決定的な区別を〈差別〉と称んだのは、「馬の毛」のことを〈言ってはならない〉とする「私」の心的機制の所在をそこに見透かすことができるからである。もちろん、これを優しさと称ぶことも可能ではあるが、その作為的な優しさを「彼女」-「女」とのやりとりに介在させてしまった「私」に対する内省、そして批判が、「愛獣」における「男」の表象として結実するのではないだろうか。「私」の〈慈悲〉行為に蔓延する〈無慈悲〉性の反省と批判の意識を戦略的に結晶化させた存在としての「男」の塑型がここで、目論まれていると考えられないだろうか。「男」は、「私」のように、「恋のかけひきのよう」な〈慈悲〉行為はしない。廃馬工場の話と「梅の話」とを「女」から聴き、廃馬工場も「梅」も直接的に見ないまま、ただ聴いただけで「梅の話」を選び取り、けれども実際は、廃馬工場の「異臭」に好奇的な欲望を発現させている。この「男」の行為は表層的には〈無慈悲〉である。好奇的な欲望の露呈によって暴露される「男」の〈無慈悲〉性はしかし、「私」の所作の淵源にもあったかもしれない。ここにはその可能性が示唆されているのであり、「男」の行為に凝縮されるその無自覚な〈無慈悲〉性を示す描出には、「私」の意識に定着しているであろう〈無慈悲〉性に対する批判的意識も込められているのではないだろうか。廃馬工場も「梅」も見ないままに、「男」の行為が描出され、それが〈物語〉のダイナミズムとして作用し物語の結末を導き出していることこそが、「愛獣」の特異性でもあるだろう。

Ⅰ　非中心化されない座標の弊害

「男」の基本的境位、それは「男」が「研究し論文を書く」研学の徒であることにおおよそ集約されるだろう。「男」は「大谷」-〈熊野〉を知っている。「熊野権現の坐す本宮」に具現するような神性の磁場、「小栗判官」伝説を所有する説話的土壌として

「男」は「大谷」-〈熊野〉を把握しており、その志向はこの土地の自然に対するまなざしにも敷衍されている。そこにある「草木の緑」を「物の怪の正体」とするのは、「男」が日本の話型の一つである〈山中異界訪問譚〉を内面化しているからでありまた同時に、まさしく百花繚乱のその事物に「禁色さながらの神々しさ」を感知するのは、「大谷」-〈熊野〉の神性をその想像領域において熟知している事の証左でもあるだろう。ここには「男」が〈熊野〉に抱く期待も内包されている。自身の想像領域で形成してきた〈熊野〉の印象が、そこにある事物の印象を決定するのは、「男」の志向-嗜好をあらわし、自身の想像上の印象、虚構的に構築されているそれに充分対応して〈熊野〉の事物があることを「男」は本質的に望んでいるのである。「男」にとって「大谷」-〈熊野〉への侵入は自身の想像領域における体験の追認であるともいえ、その土地への侵入は基本的に「何の魂胆もない」という無自覚さを装いながらも結局のところ、「救馬観音」という説話性を持つ地名に共振する「男」の欲望によるものとしてよいであろう。

そのような境位にある「男」は、〈現実〉の「大谷」において生きる「女」に出遭い、その生活圏内へと誘引され、自身の想像外の事態の受容を要請されるようになる。〈現実〉の〈熊野〉に接触するということである。「女」によって湯浴みされ、その「女」の〈現実〉の日常生活のにおいを感知する「男」は、ここまでの自然との接触の際に発動させた感覚とは異なるそれを発現させることになるだろう。

家の周囲をおおう蜜柑の木の茂みや柿の木、元来が雑木の茂る山だったから成り物の成る木のそばに生え出た雑木の葉の濃淡とりどりの緑、それにも増して、**日照りと暖かい気候で地面に次から次に生え出る草の芽が、昼を過ぎ微かに傾いた日の光を浴びて目に棘々しかった。**

「男」が「棘々しさ」を感知することはつまり、「男」がその「女」の生活圏内に布置される自然に対して受動的姿勢であることを副次的に示唆する。虚構の〈熊野〉の印象を随伴しながらそれを盾として土地に能動的に対峙してきた「男」が、この初めての湯浴みの際に暴露した「棘々し」さという攻撃性を内包した受動的感覚は、その自然への異和の表明であり、生々しい自然と不可分な形で隣接して-包摂されて棲む「女」それ自体や「女」の生活＝〈現実〉への異和へと接続されうるものでもある。異和の表明、即ち「男」は自身の境位を揺るぎない基軸としながら自身の眼に映るもの、実感として感知されるものに対して抵抗を生起させていくのだが、その在り方は、事実「女」との性交、密接な交流の現場においても十全に貫徹されるであろう。

女の家に泊まり込み、女との交情の匂いの残った闇で**不快とも悪意ともつかない気持ち**で女の汚れた足の裏を思い出し、薄い透けて見えるほどの不似合いな女の下穿きを眺めている。

ここに描出されるような「不快」と「悪意」は、「男」によって「鈍重」とされる「女」と「男」の性交ののちに、「男」の現実領域における感覚として常時生起させられるものである。「棘々しい物」や「禍々しい物」である「女」に「撫ぜ廻され」

「舐められ」るような性交は、この「男」にとって「あってはならない」「悪夢の類」の醜行であり、「拒絶」して然るべきものでもあるのだ。〈現実〉に生きる「女」とのこの性交を棄疾すべきそれとするとき、「男」の内面にはある葛藤が生じていると言えるだろう。その葛藤の末、「男」はこのような尖鋭化された不快感を反動的に露呈させる事になるのであるが、その葛藤とは、快楽として消費される性交の反復に直接的に惹起される苛立ちと通底するそればかりではなく、〈現実〉に生きる「女」に能動的に接触され、その実際的な接触により感覚される「女」の触感が、「男」の現実領域と想像領域の結界を破る契機となって、絶対的な「女」の生という〈現実〉が自身の想像領域に侵入しようとすることに対して、その想像領域内の価値の破壊を防御しようとする運動のことである。

「女」は如何にして「男」のそれを破壊しようとしているのか。しかし「女」が自覚的にそれを為そうとする叙述は為されていない。であるならば、「男」が、「女」との現実的な接触を自身の想像領域への攻撃性を孕んだそれとして認識しているかどうかが問われるべきであり、事実、「男」は「女」によって為される能動的な接触に攻撃性を観ている。「目」に「棘々しい」自然を感知した「男」の、即ち自身の信拠とする〈虚構〉的な「大谷」の自然の印象が、「女」の生活圏内に植生する事物の本当の印象に裏切られようとしたときにそれを「棘々し」ていると感知し異和を表明した「男」の基本的な境位に対応して、〈現実〉の「女」との性交に対する不快感が発動させられているといえるだろう。つまり自身の「大谷」に対する想像領域での印象を純粋に温存しておく為に「男」が、〈現実〉の「女」との交差の事実、現実領域の共有を否定的印象とともに棄疾しようとしているのである。このような自己保身の反動としての不快感の発動を反復させることで「男」は、「女」との連続的な時空間における自身の足場を確保しようとし、自身の想像領域への侵犯の危険を孕んでいるが故にどうにも堪えることのできない〈現実〉を前にして、緊張を凝縮させた感情を生起させることでその連続性に亀裂を生じさせ、その場に在ろうとする。「情欲に昂ぶる」「女」のその生の熱量に気圧されつつ、その〈現実〉に対しては受動的に異和を表明するしかない「男」はつまり、「女」による呪縛の時空を生きているのであり、その呪縛のうちに主体的選択を生起することもできず、淘汰され朧化されようとする自身の存在の輪郭、想像領域の感覚と現実領域のそれの一致の状態をどうにか保持しようとして足掻いているのである。それはなにも「女」との性交-接触にばかり起因しているのではない。「女」のリアルな生活を目撃した時にも、これに類似の異和は表明されるだろう。

女はぬっと現れた男に驚いて割った卵の手元を狂わせ中身をフライパンの端からガスレンジの上に落としてしまった。女はあわてて火を止め、濡れた台布巾で拭いかかる。ぬらぬらする卵の液がガスレンジの孕んだ熱で固まりかかるが台布巾は濡れた黄身を拭いきれず、女は流しの中に台布巾を入れて指で付着した液をこそげ、その台布巾でまた拭う。

日常の一こまとして閑却可能の、何のことはない「女」の日

常的な行動を目撃した「男」は、「鳥肌」立たせながら慌ててこの場から辞去しようとする。「男」にとって「不快」な「嫌悪」を抱かせているのは、「ぬらぬら」する「卵」の粘質性そして、「卵」を「こそげ」るという「女」の行為であり、どちらも「男」にとっては生々しい印象として感受されるのであるが、この生々しさこそが、「男」の「嫌悪」や「不快」を発動させる真因でもあろう。想像領域においては決して獲得できない体感、即ち現実領域でのみ獲得可能の体感、それは性交という粘膜の接触により直接的に、「卵」の「ぬらぬら」する粘質性を目撃する事で間接的に、ひきおこされるものである。「大谷」-〈熊野〉という山中に、いわば干からびかけた定型の神性と物語性の再発見を予測していたにも拘わらず（そしてそれは触手せずとも完遂できたであろう）、「男」がそこに発見したものは、感覚を最大限刺激し、その衝撃から想像領域の動揺を誘発させる粘質性であったと言えよう。さきに、「男」は「女」による呪縛の時空を生きると措定したけれども、それに加言するならば、触れなければ決して本質的に理解できない性質としての粘質との接触と感知により自身が絶対的に現実領域に在ることを決定づけられ、それを認知させられてしまうとき、それこそがまさしく「男」が呪縛を認識する時なのである。「女」と、そして絶対的〈現実〉である粘質性の呪縛の時空間を、「男」は生きて-生きさせられているのである。

（ここには、先述した〈山中異界訪問譚〉の話型の全き転倒をみることができるだろう。山中訪問という方法の導入についてはその類似を指摘できるけれども、その内実においては反転を看取することが可能である。〈山中異界訪問譚〉における主体の遡行を方法的に導入しながら、その内実のみを反転させていること、〈山中異界訪問譚〉の変奏も話者の戦略の一つと考えられるだろう。一般的に流通しているそれは例えば、泉鏡花の「高野聖」を思い起こす事ができようが、乱暴に言ってしまえば、日常的・現実的な時空間を生きる「男」が山中＝異界に迷いこみ、神秘を発散させる女人に出遭い、その女人の棲息する時空間、即ち超日常的・現実的時空間に呪縛されるというものである。想像領域を信拠として生きている「愛獣」の「男」、そして想像領域に対応して自身を満足させうるような風景を希求する「男」は、逆に日常的・〈現実〉的時空間としての「大谷」-〈熊野〉に生きる「女」と現実領域そのものに呪縛されているのである。ここには、「大谷」-〈熊野〉を異界として措定し、そのパラダイムに回収されてしまうことを拒絶するような話者の意志が敷衍されているように考えられるが、それについては後述する事にして、話をもとに戻そう。）

ではなぜ、「男」は、〈現実〉の「大谷」-〈熊野〉に積極的に対峙することができないのか-しないのか。〈現実〉のありとあらゆる生々しさを素朴に受容することができないのか？　想像領域を侵犯される事に対する抵抗そして葛藤を生起させる「男」の境位に対応する所作のみにこの問いを帰結させるのはあさはか過ぎよう。想像領域において捏造されてきた風景の追体験以外に、「男」が「大谷」-〈熊野〉に希求するものは何なのか。「男」が「大谷」-〈熊野〉それ自体に対して本質的に如何なる認識を抱いているのか？それは、「大谷」-〈熊野〉来訪当初の「男」の

内発的な問いにより顕かになるであろう。

歴代の天皇、上皇が繰り返し詣でた熊野だから、禅南寺に逗留させてもらい住職に熊野の意味をじっくり訊ね、人倫乱れる不安が蔓延する現在を問い、自分のような時代遅れの者はどう生きればよいかと心の奥にわだかまるものをぶつけてみたい。

ここでもやはり「男」は、文献上の記録でしかない「歴代の天皇、上皇」の熊野詣の歴史を根拠に、彼等の希求したであろう「熊野の意味」を想像し、そこから派生的に、自身の内面の深奥に「わだかまる」不安、即ち「現在」への不安、自身が「時代遅れ」であるという不安を解消させようとしているだろう。この方法はこれまで述べてきた「男」の、想像領域に盲信的な信拠を置くという〈現実〉に対しての不均衡な境位と不可分の関係にあり、徹底化されているそれであるだろう。熊野詣、そしてその言葉から連想される「天皇」「上皇」という言葉、これを「男」は熊野詣の象徴と把握しているけれども、その象徴を契機に自身の深層に定着している思念、即ち「心」-想像領域の基底に固着し、「わだかま」っている思いを喚起する。であるならば、「男」が追求しようとする「熊野の意味」も「現在」も「どう生きればよいか」も、「男」によって根源的に追求されるべき課題としてのそれらだとは同定しがたく、「男」の問いが示されることによって、「男」においては唯一性の絶無であること、が暴露的に判明するであろう。なぜならば、「天皇」「上皇」が詣でない〈熊野〉であったならば、即ち「歴代の天皇、上皇」を枕詞にしない〈熊野〉であったならば、「男」が右引用文のような問いを生起させうる可能性はなかったからである。約言してしまえば、「歴代の天皇」「上皇」への模倣的同一化が無自覚ながらも志向されていることにより励起されている「男」の問いは、模倣的であるが故に本来的ではない、ということである。そして「男」に唯一性が認められないことで逆説的に、「男」にとって〈熊野〉も本質的な唯一性を保証するような場ではない、ということも顕かになるだろう。唯一性絶無の「男」は、ただ事物に対して差異的に在るだけであって、その在り方のみで自足可能の「男」にとって、「大谷」-〈熊野〉という事物における他者性-他性は要求されない。つまり、「男」によって志向されまなざされる〈熊野〉は、存在様式として他-他者である必要はないのである。唯一性絶無の「男」が、その想像領域において予測された感覚を恃みながら〈現実〉を渡り歩こうとするのも理解はできよう。その境位を固持していなければ、想像領域と現実領域の背反する感覚の、その不一致により生じる剪断に応じて「男」の自我は軋み、崩壊するかもしれないからである。だからこそ「大谷」-〈熊野〉はそれ自体で在り屹立する〈現実〉の事物であっても、そこに見出されるべき他性への接触は「男」にとっては触犯行為とされるのであり、故に〈現実〉の事物やそこに立ち顕れる現象の純粋受容が、「男」によって果たされることはない。

「男」がなぜ、現実領域においての生々しさを素朴に受容できないのか、それは右のような「男」の境位が応えている。「男」にとって〈現実〉の「大谷」-〈熊野〉の生々しさを認定する瞬間、それは自身の〈現実〉即ち唯一性絶無の自我（それは「男」

の想像領域を形成する存在それ自体の始源でもある）が露呈し、それを認識・認定せねばならぬときであり、例えば、「女」や「女」の生活に接触し、「女」の現実領域を共有させられたとき、それに対して「嫌悪」や「不快」を発動させていたように、「男」は〈現実〉における自身の位置の自覚的認定を回避するのである。

「男」の現実領域における不快感の発露、そしてその契機である〈現実〉に対しての苛立ちに占有され、ただただ強度の等しい性交と湯浴みの反復が描出されているだけの物語は、澱み停滞した空間を醸成している。これはひたすら「男」の境位の揺るがなさ、に拠っていると言えるであろう。そして、この揺るがなさは「男」の感性の死滅を意味するのではないだろうか。感性の死滅、すなわち〈現実〉の事物との突発的な直面や現象の突発性に不適応を示す「男」の、いわゆる観念の凝固状態である。つまり「男」は想像領域を占める内実を絶対としながら〈現実〉を領略しようとする自身のまなざしを決して相対化させることはなく、またその自身を〈非中心化〉させることをできないでいるのだ。以上のような「男」の視座を中心にして展開する物語の前半は、その描出のほとんどが「男」のまなざしに拠っているが故に、その躍動を拒絶されるという事態を、「男」の境位による弊害として引き受けていると言わざるを得ないであろう。

II 〈物語〉信奉者の幸福な死

しかし、「男」の苛立ちの充溢により停滞した〈物語〉が、胎動の様相を帯び始める。「女」と「男」の実質的な言葉の応酬、交流が描出され、二人の相互的な活動が成立し始めるからである。「男」のまなざしにおおよそ占有される叙述ではあるけれども、それに「女」の在り方、そして言葉が微量ではあるが貫入し、それに反応し作用を受ける「男」の志向が〈物語〉の運動に参与し始めるのである。つまり「男」の緊張的態度の緩和により、〈物語〉はそれに連動して潤滑し始めようとするのである。

女のその一言から、男はふと中辺路を餓鬼となった小栗判官を車に乗せ率いて熊野の霊験あらたかな湯に運んだのも、天王寺まで病を患い痩せさらばえた信徳丸を肩にかついだのも、たおやかな女なぞでは決してなく、ちぐはぐが男の眼にみにくさと映るような、情欲に昂ぶるような女だったのだろう、と思いつき、女を仔細に眺めなおす。そう眺めれば確かに女は諸国を放浪する芸人らが辻々で語った説教とは別の、本当の小栗判官の女や信徳丸の女の現身のような気がした。

「額に、眼に、鼻に這うぬらぬらする女の唇や舌」の動きに「欲情に昂ぶった」「やむにやまれぬ」ものを感受する「男」はそのような性交を、「いままでの経験とまるで違」い、「女に犯されているような」「女と男の立場が入れ代」るような「不快」と「悪意」をもよおすようなそれ、として棄疾しようとするのだが、その方法として「男」は新たな術を導入する。二度目の湯浴みを契機に自身を「小栗判官」に見立て、それに対して模倣的に自己同一化することによってありもしない霊験を顕現させようとするのである。〈虚構〉の男「小栗判官」に、現実領域において、受動的感覚体としての位置を生きる自身を重ね合わせるこ

とは、〈現実〉に生きる「女」をも〈虚構〉の女と重ね合わせる所作へと連結される。「ちぐはぐ」な動きの奇異を「男」によって「みにく」いとされた「女」は、その突出的な特異性故に強度の物語性を帯びた身体の者として「男」に認識され、在ることを許容されるようになるのである。つまり、「女」の「ちぐはぐ」が「みにくさ」に同定され、強固に〈差別〉化された存在として認識され、その突出、即ち過剰であるが故の余白に〈物語〉が埋め合わせられるような身体が「男」によって「眺めなお」されたとき、「男」と「女」の、〈虚構〉の存在との融合を前提とする比較的（物語前半と比して）互換性を帯びた交流が開始されることになるだろう。しかし「男」は、断じて現実領域を共有する「女」の存在それ自体を許容したわけではなく、あくまで「小栗判官の女」そして「信徳丸の女」として、許容しているだけでしかない。つまり〈現実〉の「女」の特異性は、〈物語〉的な符牒を随伴して初めて「男」によって許容されるそれなのであり、であるならば、「女」が〈現実〉に生きるという絶対性は、予めそして無自覚に「男」によって捨象されていると言えるだろう。「女」は「男」の想像領域の充足に相応しいパーツとして措定されるのであり、「男」のまなざしの変化は、〈現実〉に対峙することにより生起される苛立ちや、現実領域において呪縛されることへの抵抗としてのみ純粋に発現されていたこれまでの「嫌悪」と「不快」とは異なるそれを、次なる性交の現場において導き出す事になるであろう。

自分のあげる声が、熊野に来てよみがえる小栗判官の歓喜の声のような気がし、一方の乳首からもう一方の乳首に移り、腹を脚を、ふぐりを、尻をなめる女をまるで嫌悪とは違う感情、自分とは切っても切れないものでつながった者を愛しむような感情に包まれ、女のように声を上げる。

徹底的に生身と生身の交接である性交の現場においても、即ち皮膜の接触による感覚を捨象することの不可能な、現実領域にある自身の肉体を絶対的に認識せざるを得ない他者との衝突の現場にあっても、「小栗判官」を導入する「男」にはもう迷いがない。「熊野の意味」を、「上皇」や「天皇」の存在を想定しながら追求しようとした「男」は、今度は完全に「小栗判官」と一体化してそれを生きることで、「女」に能動的な「愛しむような感情」を生起させ、最高度の快楽を獲得する事になるのであり、受動性の胚胎する客観的参加ではなく、〈虚構〉の「小栗判官」と自身を接合させることで「女」との、現実領域において共有される経験としての性交への主観的な参加を成功させているであろう。「男」の想像領域は「小栗判官」と自身の融合による快楽で充足し、その現実領域は「女」との肉体的交接による快楽によって充足する。現実領域と想像領域の狭間にあって、想像領域での経験を捨象しきらないまま絶対的な〈現実〉と向き合わねばならない現実領域での自身の在り方に対して苛立っていた「男」、「女」との〈現実〉を生きていた「男」、「女」と性交を重ねていた「男」が、完全な「小栗判官」と成ること（「小栗判官」で在ること）で、その位相において「切っても切れないもの」で繋がった「女」との性交によって肉体の快楽と精神の快楽の相乗する最高度の快楽を獲得したのである。だからこそ、この最高度の快楽を経験した性交の直後に反転、生起され

る最高度の「耐えがたいほどの嫌悪」とは、「男」が自覚的に推察するようなものに起因するのではないだろう。つまりそれは「鈍重な女のせい」でもなく、「禁欲し身を浄く保つ禅寺での投宿予定とまるで反対の今のせい」でもなく、そして性交に対しての反動的なそれでもなく、主観的に「小栗判官」と一体化して生きることで、「照手姫」ではない「女」と共有する現実領域に生きる事自体を閉鎖的に密閉しようとしていた「男」が、「快楽の昂ぶりから一挙に突き落とされるような感覚」と共に、自身が現実領域に絶対的に「男」として在ることを否が応でも認識せざるを得ないという事実の感知に惹起されているのである。「耐えがたい嫌悪」とは、「男」が、模擬的な存在である「小栗判官」から本来的な存在である「男」に戻る瞬間の、現実領域における五感の覚醒に対する「嫌悪」である。つまり「大谷」-熊野〉の象徴であったはずの〈虚構〉の「小栗判官」の存在を想像的に吸収し、血肉化することで獲得可能であった最高度の快楽が沈静、そして消尽し、現実領域の本当の肉体を感覚しなければならないことが、「男」にとっての「嫌悪」の対象なのである。ここでの「嫌悪」もやはり、もちろん差異を内在化してはいるけれども、「小栗判官」との融合の発見以前の〈現実〉に対する「男」の苛立ちと通底することは否めない。「小栗判官」を擬態しても、結局自身の肉体が収容-呪縛される現実領域に、その肉体が存する限り、想像領域における奔放な精神の活動を制約してまで在らねばならないことは、「男」にとって苦痛の主因でしかないことに変りはないからである。〈虚構〉と〈現実〉の背反状態により生起される苦痛の真因に目を向け、しかも本当の「嫌悪」すべき対象であるそれに自覚的に気づかなければ、結局「男」は反復によりもたらされる苛立ちから逃れられる事はないであろう。つまり、強度や内実を違えながらも、結局のところ、「男」はその現実領域において、〈現実〉に対する「嫌悪」を発現させ続けねばならない生を完遂せざるを得ないのである。しかし、ここで「男」は「小栗判官」を擬態すること、「物語上」の「男」と成る事を自覚的に選択するということ、そしてそれが最高度の快楽、肉体の快楽と精神の快楽の相乗したそれを生起しうるということを、体験した。即ち「物語上」の人物となることが、最高度の快楽の獲得の必要条件であることを学び取ったのである。この体験は、「男」によって相対化されることも、客観的に反芻されることもなく、無自覚に内面化されてゆくだろう。なぜならそれは、「男」によって本質的に希求された所作なぞではなく、現実領域で発現された精神的な苛立ちをその場凌ぎに消費するべく反射的に選択されたそれでしかないからである。であるならば同時に、「男」の苦痛と不可分の関係にある「耐えがたい嫌悪」も瞬間的に発動されたものであるが故に、それが持続され、相対化されることはないといえるだろう。〈現実〉の事物や現象に対する現実領域においての復讐的な不快感の発現は、「男」の根源的な苦痛の反動として励起されていると把握できるものではないし、それを瞬発させる内奥の浄化、即ち「男」の存在原理の解体のち生産という有機的な運動に寄与するそれでもない。苦痛は、それが持続されるが故に膠着の打破として機能し、その破壊を前提とした次なる創造へと接続されなければ、単なる戯れのそれとして回収されま

た、「男」に即して言えば、血を流さない苦痛を垂れ流し続けるだけのその存在形態の再生産をいたずらに約束するだけになる。しかし、先述したように、自身を苛立たせるような〈現実〉を完全に密閉する所作を「男」は発見した。それは、「物語上」の「男」との融合であり、その所作に象徴されるのは「男」の想像領域を全的に支配する〈物語〉による現実領域の統御という事態である。「女」との湯浴みや性交の反復されるばかりの堪えざる〈現実〉に対して「男」は「嫌悪」を発露させ、それによってその連続性に亀裂を生じさせ、そこに「小栗判官」に象徴される〈物語〉を挿入する。「男」の想像領域からスライドされ、現実領域における感覚を経て〈現実〉の「大谷」-〈熊野〉の空間に出現してきた〈物語〉はそこに代入されるだけに留まらず、その亀裂を押し広げるほどに肥大し、「男」の現実領域における感覚、知覚、認識すべてに滲入するのは言うまでもなく、「男」によってみられる〈現実〉の空間をもその重力で押し潰し、占領する。そのような事態を引き起こす所作に対する内省も批判も持たぬ「男」は、それに対する無自覚さ故に無意味な苦痛を反復するがしかし、快楽を前にしてそれは忘却されるのみである。であるならば、「男」は「物語上」の人物との融合や、それによってひきおこされる事態を再度経験する事を希求するであろう。なぜならそれは、なにより「男」に最高度の快楽をもたらすものだからである。根源的ではない苦痛を忘却させてくれ、加えて最高度の快楽をもたらしてくれるもの、「男」にとってそれは「大谷」-〈熊野〉の〈現実〉の絶対性ではなく、そこに沈殿する「大谷」-〈熊野〉という〈物語〉、「小栗判官」伝説や「信徳丸」という〈物語〉それ自体である。

「男」にとって格好の餌、これ以上ないというほどの欲望の対象である〈物語〉は「女」によって新たに与えられることになるだろう。「大谷の道ぞいに植えられた何千本という梅の木から花弁を取って香料を採り、手や肌につけるクリームを作る工場」、「塩漬けにした廃馬のたてがみや尻尾を干し梳いて、刷子や弓弦に仕立てる作業所」の〈話〉である。はたして「男」はこのごちそうに食らいつく。「小栗判官」を生きることで獲得した快楽がそこには待機しているに違いない。

「男」は、自身の想像領域を侵犯しない存在として把握しなおした「女」に、「熊野の意味」を問い、「山中深く棲む意味」を問う。「物語上の女」として虚構性を貫入させられた「女」にだからこそ、「男」の硬直的態度は緩和され、緩んだ末に「問う」という積極的態度が生起されるのだ。それに対する「女」の応えは前述したような「大谷の道ぞいに植えられた何千本という梅の木から花弁を取って香料を採り、手や肌につけるクリームを作る工場」(A)、「塩漬けにした廃馬のたてがみや尻尾を干し梳いて、刷子や弓弦に仕立てる作業所」(B)の〈話〉である。(A)の〈話〉は、「女」によって「嘘」即ち〈虚構〉であることが明示されるが、(B)については、それが〈虚構〉であるか否かは、「女」によって明示されずに保留される。しかも、それが真実であるか否かも、「クリーム工場に働いているのか」という「男」の問いに「途惑」った「女」、「作業所」の〈話〉を提示してのち「男の顔から何かを読み取ろうと見つめ」た「女」の行為それ自体の内実を詮索することで推察するしかないであろ

う。（A）を「嘘」だと明示するからといって逆説的に、（B）を真実だとして短絡的に決定することはできない。事実、「あっちの山の方」にある「作業場」は、「男」には「見えな」いのである（そしてそれは読み手にも見えない）し、そしてさらに、「梅」の「芳香」と「廃馬のたてがみや尻尾」の「異臭」も、「男」が「注意深く嗅」いでも存在しないのである。であるならば、（A）も（B）も「男」にとって、その真偽の定かでないことだけが顕かになる。問題はまず、（A）（B）どちらが真実か、ということではなく、また「女」が「嘘」の〈話〉である（A）を提示することとその動機でもなく、その（A）（B）の〈話〉を聞いた「男」が（B）の〈話〉を選択した事実にあるだろう。「何もかもを腐敗させてしまうような」「死の匂いそのもののような」「臭気」を湛えた（B）の〈話〉、「女」によって提示されたおぞましいそれは、「男」を欲動させた。

匂いに芳香と臭気の違いがあるにすぎないと言うように、「梅の花か」とつぶやく。風にどんな異臭が混じっているのかと注意深く嗅ぐと、緑の匂いが鼻につく。

「梅の花」の〈話〉を選択しているように装いながら為される「異臭」、異なる臭い、の選択。この「男」の行為を通じて想起されるのは、かつて「女」の動きの「ちぐはぐ」を「みにくさ」として同定した「男」のまなざしである。「女」の「みにくさ」即ちおぞましき特異性に相応しい〈話〉として（B）は選択され、「みにく」い「女」を更に特権化しようとする欲望がここに浮上する。「女」におぞましさの賦与を試み、それを特権的に囲い込もうとするその所作は、再三述べている「男」の境位故だと言えようが、しかしそれは、「緑の匂い」という「大谷」-〈熊野〉の〈現実〉の自然、事物によって裏切られる。ただし、「男」は一度目の湯浴みの際に「緑」に観じた「棘々しさ」をもうそこに観じない。なぜなら二度目の湯浴みによって自身を「小栗判官」と接合することを学んだからであり、そうすることで現実領域において生起させる苛立ちをやり過ごすことがもう、その身体には記憶され、想像領域において予測される感覚と現実領域においての実際の感覚はもう齟齬を来さず、剪断も生じず、であるならば、「男」によって、苛立ちや不和への焦燥は生起されないからである。「小栗判官」という〈虚構〉の人物の生を擬態的に生きるからこそ「男」は、〈現実〉の「大谷」の「緑の匂い」を嗅いでも、混乱も抵抗も生起させず、ただただそれを受容することが可能になる。

そして先述したような最高度の快楽と、その反動としての「耐えがたい嫌悪」のその二極化した感覚の振幅のうちに三度目の湯浴みを経験した「男」は「梅の香気」が「風」に「混じっているように思」う。「梅の香気」なぞ現実領域における「男」に感知されるはずのものではない。それは「女」の「嘘」であり〈虚構〉であり、語られた〈話〉＝〈物語〉でしかない。にも拘わらず「男」がその「芳香」を感知するのは何故なのか？「男」がその架空の、〈虚構〉の匂いを感知したことは即ち、「男」が「女」の〈物語〉に囲い込まれてしまったことだと解釈できないだろうか。「男」の現実領域での感覚も想像領域における感覚も全てその〈物語〉にひかれ、くるめられ、とかされ、「不快」も「嫌悪」も「棘々し」さも、〈物語〉に吸収されてしまって残

るのは、〈物語〉を確実に選び取っている「男」の無防備な自我である。〈現実〉の「女」の提示した新たな〈物語〉は、「男」の現実領域において受信され、そしてそれは〈物語〉であるが故にそこでの異和は表明されず、そのまま想像領域へと引き継がれ、全的に浸透し、現実領域の感覚と想像領域の感覚を背反させぬ〈物語〉に呼び醒まされた前-主体性である自我は、反転して現実領域における肉体と感覚に〈物語〉を生きることを要請し、〈物語〉となったが故に苛立ちを生起させないで済む〈現実〉との対峙を柔和に為す「男」を現実領域に象り出すだろう。

梅の花の香気が一層強まった気がして、ふと一緒に作業場で働いていた昔の男もこうやって女に体を洗われたのだろうかと思い、昔の男を思い出す事があるのかと訊くと、女は嫉妬するのかと言うようにくすりと笑う。女は笑いを呑み込むと、綺麗だと無言で呟くように男の下腹、脚を撫ぜ廻し、こんなにしなやかな固い肉をしていなかったと小声でつぶやき、湯をたっぷり含んだタオルで男の内腿をこすり、「つい、死んだきによ」と突き落とすような言い方をする。

実在するのか否かの定かでない、「女」の〈物語〉の登場人物である「昔の男」が、「つい、死んだきによ」とその死を語られたように、「男」もそれと同様〈物語〉＝〈現実〉を生きる事を要請されるであろう。想像領域を占める気圧を現実領域にも浸透させた「男」により〈虚構〉の「梅の香気」が嗅がれて、その二領域の浸透圧は等しくなり、「男」の想像領域と同強度の圧力を持ち始めた現実領域を生きる「男」によって把握される〈現実〉はもう、〈物語〉と称んでもよいだろう。「梅」の〈話〉を選択した「男」によって、「大谷」のこの空間にある〈現実〉と〈物語〉は相互浸透的に融合させられてしまっている。「男」は、既知の〈物語〉である「小栗判官」や「信徳丸」の生を踏襲したように、「女」の提示した〈物語〉を反射的に既知のものとし、「昔の男」の生をも踏襲する。ならば、〈虚構〉の産物である「小栗判官」を擬態的に生きる事が「男」にとって「喜悦」であったように、「昔の男」を擬態的に生きる事も「男」にとってはまた、「喜悦」を生起させるだろう。想像領域を信拠とする「男」はこうして「女」の〈物語〉の中（しかしそれは「男」の想像領域に相即した〈現実〉である）に生きることによって、「喜悦」に塗れた幸福な死を迎えることになるであろう。提示された〈物語〉に瞬時に食らいつく「男」には、現実領域における根源的な苦痛などありはしなかった。断続的に生起される突発的な苦痛、即ち本来的な治癒の求められないそれは、ただただ想像領域を充足させるような〈物語〉と自身との全的な結合を招聘する契機でしかなく、根源的な苦痛を最後まで感知しなくて済む「男」は、幸福である。しかし、その存在は、自身の想像領域を優先させ、〈物語〉の重圧-「重力」[5]に無自覚であった為に押し潰されてしまう、つまり死を迎えるという哀れなそれとして記憶されるであろう。無論、「男」にも〈物語〉の重圧を重圧として引き受け認知する契機はあった。三度の湯浴みの直前である。性交ののち幾度も不快感を露呈させていたが、この〈現実〉に対する不快感の発動、即ち現実領域で感覚される苦痛が持続されていれば、「男」が想像領域を信拠とする自身の境位、〈物語〉

の重圧に無自覚な自身の境位と相対し、〈現実〉の絶対性を受容し、それを検討して変化、新生してゆく可能性はあったのである。その可能性を剝奪したのは、湯浴みそれ自体である。「傷」＝苦痛を「癒し」てくれる「湯」は、「男」の苦痛をそのまま霧消させた。〈熊野〉の「湯」という蘇生の隠喩であるそれが、隠喩の機能を超えて「男」を実際に蘇生させたのである。想像領域を恃みとしながら現実領域に立ち、〈現実〉と対峙するその境位への蘇生である。

想像領域の印象・感覚を絶対とし、それを信拠とする固定化した存在様式を貫徹するべく、〈物語〉を求めて〈熊野〉を来訪した「男」は、未知の新たな〈物語〉を発見し、そしてそれにより最高度の快楽、即ち最高度の「喜悦」を経験するよう仕向けられているのだが、「男」においてそれが自覚されないままにテクストは結末を迎える。「男」において想像領域と現実領域の強度と内実が合致したうえで感覚されるその「喜悦」はあくまで〈虚構〉でしかない。〈現実〉に対する苛立ちの発現や、〈物語〉の〈現実〉への導入によって、〈現実〉との確かな交錯を回避しながら、その想像領域を固守しきろうとする足掻きにより緊張した「男」の「しなやかな固い肉」を見て、「女」は、「男」に対して「綺麗だと無言でつぶやく」のだ。

〈物語〉を差し出した「女」はほくそえんでいるかもしれない。「大谷」→〈熊野〉に〈物語〉を希求して来たが故にそれを食み、生きるようになる、そして死ぬことになるかもしれない「男」の顚末を見ながら。

「愛獣」は、「熊野信仰」の制度化したものとしての「小栗判官」伝説や「信徳丸」のように、新たな〈熊野〉の〈物語〉として、「男」に似た者の欲望を惹起させるようにそこにありつづけるだろうか。〈山中異界訪問譚〉ならぬ〈山中現実界訪問譚〉の様相を帯びた「愛獣」は、〈物語〉を求めてやまない固定的な境位にある「男」を視点人物とする事で、〈現実〉が〈物語〉として編成される過程において、そこに生きる者（例えば「女」）の参加が真に必要とされるということを逆説的に提示している。

そして、〈熊野〉とは、乾き凝固した〈物語〉の滞積する空間であってその享受を反復的に約束する場ではないが、それを希求する欲望に、無自覚のままに忠実な行動原理をとる者にとっては、生々しい〈物語〉を提供する場となるのである。

注

（1）初出は、一九八九年『新潮』五月号。本稿における引用文は、『中上健次全集10』（一九九六年三月　集英社）からのものである。

（2）『紀州　木の国・根の国物語』（一九七八年七月　朝日新聞社）として上梓される一連の連載は、『朝日ジャーナル』一九七七年七月一日号から一九七八年一月二〇日号において為されている。本稿における引用文は、『中上健次全集14』（一九九六年七月　集英社）からのものである。

（3）初出「木の国・根の国物語－7－朝来（ルポルタージュ紀州）」『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）一九七七年八月二十六日号

（4）金井景子「『重力の都』棘のある和讃」『国文学　解釈と鑑賞　別冊中上健次』一九九三年九月／中村三春「中上健次「愛獣」と説経節－「吉野葛」を経由して」『伝統と変容』二〇〇〇年六月

（5）中上健次「あとがき」『重力の都』　新潮社　一九九二年十月　谷崎潤一郎に『春琴抄』という佳品がある。連作『重力の都』は大谷

崎の佳品への、心からの和讃と思って頂きたい。『重力の都』で物語という重力の愉楽をぞんぶんに味わった。小説が批評であるはずがない、闘争であるはずがないと確認したのもこの連作であった。連作を支えてくれた編集者諸氏に感謝する。当然の事ながら、一冊の本がここに存るのは、編集のみならず印刷、造本、運送、流通の方々の眼に見えない力の賜である。深謝する。